

稲作だより

第 11 号

令和 7 年 11 月 4 日発行

やまがた温暖化対応米づくり日本一運動

JA さがえ西村山 JA さがえ西村山水稲部会
(TEL 86-8184)

西村山農業技術普及課 (TEL 86-8287)

**秋耕を行い、稲わらの腐熟を促進させましょう！
土づくりで異常気象に負けない圃場準備を！**

稲わらの施用効果

- ・稲わらを施用すると、土壌中の養分量が高まります。また、土壌が柔らかくなり、孔隙率が高まるため、水分や空気を保持する機能が高まります。

表 1 稲わらで土壌に還元される養分量 (kg/10a)

窒素	リン酸	カリ	石灰	苦土	鉄	ケイ酸
4	2	14	3	2	1	60

※稲わら由来のケイ酸の利用率は約 10～20%

表 2 稲わら施用による土壌物理性の変化

	孔隙率 (%)	貫入抵抗値(10cm)
稲わら施用	7.2	8～9
無施用	6.5	1.3～1.4

秋浅耕で稲わらの腐熟促進

- ・稲わらは気温が 10℃以下になると分解が進まなくなります。稲刈り後はできるだけ早い時期に **5cm 程度の浅耕**を行い、腐熟促進を図りましょう。
- ・石灰窒素や発酵鶏ふんの秋施用で、稲わらの腐熟が促進されます。ただし、石灰窒素は、玄米粗タンパク質含有率が高まる場合があるため、連年の施用や、地力の高い圃場での使用には注意が必要です。
- ・つや姫の場合、石灰窒素の投入量は 10kg/10a を上限とし、必ず基肥の減肥を行いましょう（地力高、全量基肥栽培の場合、石灰窒素施用は控える）。

稲わらの分解が遅れると…

- ・春に稲わらの分解が急激に行われることで、土壌の異常還元（ワキ）が進み、根が伸びにくくなることで、稲の初期生育が抑制されます。早めの秋耕や腐熟促進剤を施用し、稲わらの一層の腐熟促進を図りましょう。

**JA さがえ西村山 LINE アカウントからもお覧になれます。
登録は QR コードからお願いいたします**

～農作業 あせらず！気もまず！ゆっくりと！～